



アクセシビリティ&アカンパニスト 研究プログラム 2015

障害のある人が社会の中でアート活動をはじめるために



SLOW LABEL®



スローレーベル

アクセシビリティ&アカンパニスト 研究プログラム 2015

目次

- 04 はじめに
 - 06 地域社会でアート活動すること
 - 07 アート活動をはじめるときの課題
 - 08 アクセスコディネーターとアカンパニストのしごと
 - 10 アクセスコディネーター 廣岡香織さん
 - 12 アカンパニスト 保住綺草さん、本田綾乃さん
 - 14 アカンパニストをあらわすキーワード
 - 15 アクセスコディネーターとアカンパニストの連携
 - 16 アクセスコディネーター、アカンパニストと
活動した方々の声—かかわりと変化
 - 18 創作活動に対する、15 人の Answer
—活動に取り組む際に必要なこと
 - 22 平成 27 年度実施事業
 - 28 スローレーベルについて
 - 30 ふりかえって
-

本書は、障害のある方のアート活動を「はじめる」「すすめる」ための環境づくりやサポート人材のあり方についてまとめた、コンセプトブックを兼ねた事業報告書です。厚生労働省「平成 27 年度 障害者の芸術活動支援モデル事業」アクセシビリティ&アカンパニスト研究プログラムの実施にあたって、スローレーベルならびにスローレーベルとかかわりのある方々が必要だと考えていることや、実施事業の記録を収録しています。

はじめに

障害のある人が社会の中でアート活動を「始める」ためには
何が必要でしょうか？

障害のある人がアート活動に参加するとき、

その場に行くまでのアクセス、

たどり着いてからのコミュニケーションなど、

様々なハードルがあります。

そのハードルを取り除くことによって、安心して

のびのびと活動に参加することができるように環境を整えたい。

環境を整えることで、一人でも多くの人に参加してほしい。



そんな想いを胸に、スローレーベルは、

「アクセスコーディネーター(障害のある人が
アート活動に参加するための環境を整える人)」と
「アカンパニスト(障害のある人と一緒に創作活動をする人)」
といった、サポートするための「人」の発掘と
「方法(ノウハウ)」の研究に取り組みました。



障害のある人が社会の中でアート活動を「すすめる」ことが
何をもたらすでしょうか？

普段出会うことのない障害のある人・ない人が、

アートを通じて互いの特徴を理解し、

補い合いながら活動をすすめることで、

日常の中でもコラボレーションする機会や

支え合う心が育まれます。

アートを通じて、障害のある人・ない人／福祉の現場に
かわりがある人・ない人の交流人口を増やすために。

考えていること、取り組んでいることをご紹介します。

地域社会で アート活動をする



障害のある人が抱える事情や状況は様々です。たとえば、アート活動の場として福祉施設から質の高い作品やアーティストが生まれる一方で、障害のある人の中には、施設等に所属せず、地域で生活を送る人も多くいます。そういった方がアートと出会う機会をつくるためには、どのようなことが必要でしょうか？ スローレーベルは、福祉の枠組みを越えたあらゆる人々のアート活動支援として、創作の場を「地域」におき、その環境を整えていく取り組みをはじめました。

スローレーベルが拠点としている神奈川県では、障害のある人が生活や仕事の場所を地域に移す「地域移行」がすすんでいます。

生活の場

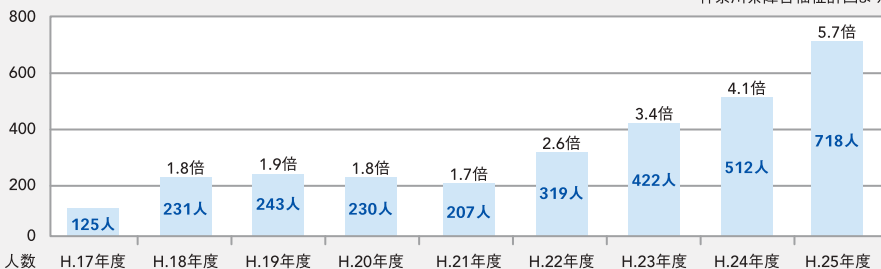
病院・入所施設 → 一般住宅・グループホームなどへ

はたらく場

福祉施設・事業所 → 一般企業への就職などへ

福祉施設から一般就労への移行者数

神奈川県障害福祉計画より



アート活動をはじめるときの課題

アート活動にあたって直面する様々な課題をひとつひとつ確認し、どうすればクリアできるのかを当事者と一緒に考えました。

障害当事者や保護者の不安…



アクセスマネージャーとアカンパニストのしごと

環境面、創作面、物理面、心理面…

様々な側面から、アート活動をサポートする役割を果たす存在が、
アクセスマネージャーと、アカンパニスト(伴奏者)です。

アクセスマネージャーもアカンパニスト(伴奏者)も、主体的に創作の場づくりを担う存在。こうした人材が増えていくことで、障害のある人のアート活動の場は社会の中に広がっていくと考えています。



アクセスマネージャー ACCESS COORDINATOR

人や場所が変われば、必要な情報も、サポートも変わる。ひとりひとりにとって最もよい環境をさぐり、創造性が発揮できる環境を整えます。

たとえば

情報をわかりやすく伝える

その人の状況をよく聞き、必要な情報を最適な手段で伝えます。チラシなどでは伝えきれない、きめこまかな情報を届けます。



たとえば

創作の場までの不安を取り除く

バリアフリー情報を個別に提供したり、事前にその人の状況をヒアリングすることで、参加までの不安やストレスを最小限にします。

たとえば

現場での体調や精神状態をチェックする

現場では様子をよく観察し、必要に応じてケアを行います。



アカンパニスト ACCOMPANIST

創作の可能性と一緒に広げる伴奏者。お互いの充実した創作体験や、最高の作品づくりを目指し活動に取り組みます。

たとえば

困っていることを一緒に乗り越える

創作する中で起こる物理的・心理的な困難も、創作者という同じ立場で寄り添いながら乗り越える方法を一緒に探ります。



たとえば

創造性を引き出し合う

本人が気づかない隠れた創造性を見つけ、引き出し合います。



スローレーベルにて、アクセスコディネーターとして活躍する廣岡香織さん。その役割をご紹介します。



廣岡 香織さん (Kaori Hirooka)

看護師の資格を持つ廣岡さん。女優として舞台芸術に関わった経験もあります。2015年よりアクセスコディネーターとして活動を開始。

創作まで

01 それぞれに合った情報を提供する

- ・物理的: バリアフリー情報をつめる
- ・身体的 / 精神的: 本人の情報をつめる (特徴や発作の有無、可動域など)

移動のストレス・体力消費を最小限にして、アート活動により多くのエネルギーや気持ちを注げるようにしています。

創作の現場で

誰にとっても居心地のいい環境をつくるために、声かけの方法やタイミングなど、細かいところにも気を配っています。

02 環境をととのえる



- ・物理的: 危険なものをつりのぞく
- ・身体的: 体調をチェックする / ケアする
- ・精神的: 一人ひとりへ声をかける

03 可能性をひろげる

- ・身体的: 可動域をひろげるチャレンジをたすける
- ・精神的: 気分の浮き沈みがあっても無理なく参加できるよう、ときには休憩や現場をはなれる判断を促すことも



参加者が自分の可能性に対してチャレンジできるように、あらゆる方面から働きかけ、その日のベストを達成し、自信に繋がるようにサポートします。

SCENE NO.1

身体表現のワークショップを初めて体験する参加者が、車椅子から降りて身体を動かすことに挑戦しました。はじめは不安気で床に置いたクッションに座ることが限度かと思われましたが、本人の中にどんどんチャレンジしていく想いが芽生えました。アクセスコディネーターは体調や痛みが出ていないかを確認しながらサポートしました。



創作のあと

04 ふりかえり



- ・アカンパニストとミーティングを行う
- ・スタッフ全員と情報を共有し、対応を確認する
- ・役割をつくる

現場の共通認識がきちんととれていればそれぞれの動き方の質は上がり、結果としてひとりかけられる時間が増えます。1にコミュニケーション、2にコミュニケーション。

何らかの事情でパフォーマーとして参加することが難しくなった人も、それ以外で関わり続けられるよう、その人にあった役割をつくります。



SCENE NO.2

発達障害の症状や発作から、パフォーマーとして活動することが難しくなった参加者がいましたが、継続して関われるよう、制作アシスタントという役割をつくりました。パフォーマーではなくても、作品をつくりあげるために欠かせない役目を果たしてくれました。

廣岡 香織さんのまとめ

ひとりひとりに最適なサポートのかたちとは、全てがマニュアル化できるようなものではないと感じています。アクセスコディネーターには自分で課題を発見し、解決にむけて自発的に行動すること、また当事者に対して冷静に、適切な距離感で寄り添うことが求められると思います。そして、ただ「ケア」するだけではなく、障害当事者が表現活動に主体的にかかわり、少しでも自立して、自分の判断で動けるようになるにはどうすればよいかを見極めながらサポートすることが最も大切だと考えています。



スローレーベルの「FACTORY (市民参加型ものづくりの場)」で、障害の有無にかかわらず一緒にものづくりをする人たちに寄り添い、ときにサポートする保住綺草さん。

スローレーベルのプロジェクト「SLOW MOVEMENT (市民参加型パフォーマンス)」にて、障害のある人たちと共にパフォーマンスを創り上げた本田綾乃さん。

2人のアカンパニストに、その活動について伺いました。

保住 綺草さん Kisa Hozumi

ACCOMPANIST 01

Q 普段はどのようなお仕事をしていますか？

グラフィックデザインの事務所にアルバイトなどを行っています。

Q アカンパニストとして活動をはじめたきっかけは？

学生のときFACTORYのボランティアをお友達に誘われました。もともと人見知りですが、ものをつくっているときは人とつながっているなという気持ちがあるので、そういう活動だったらできるかなと思ってはじめてました。



Q どのような活動をしていますか？

誰でも参加できるものづくりのワークショップで、やり方を説明したり一緒につくったりします。興味のありそうな方がいたら「一緒にやりませんか?」「楽しいですよ」とお声がけて、とりあえず巻き込みます。出来る人とはおしゃべりしながら一緒にやったりするというものもあるのですが、苦戦している人には「こういう風にやるときれいにできますよ」とお話ししながらやっています。

Q 創作のときに心がけていることはありますか？

先生と生徒みたいになってしまうと、溝が生まれてしまいます。それよりは、一緒にいろんなものをつくりあげて、楽しく活動できた方が良いなと思っています。ちょっとだけ、私の方が知っているけれども、基本的には「一緒につくろうよ」と、友達みたいな感じています。また、参加者には子供も大人も、障害のある人もない人もいます。誰と話すときも、そんなに難しい言葉にならないように、あえて人によって話し方を変えなくていいように、みんなに通じるような言葉でというのを心がけています。

Q 「アカンパニスト」とはどのようなものだと思いますか？

アカンパニストは「伴奏者」という意味だと思うんですけど。ちょっと隣で一緒に歩いて行くみたいな感じで活動していたので、そういうことかな?と思います。アカンパニストの中には、リーダー的にぐいぐい引っ張ってくれる人もいて、みんなが「やるぞー」ってなると、「おー」ってなるので、そういう人も必要です。駅伝で、障害のある参加者がマラソンのランナーだとすると、最初に走っている車の人と、後ろにいるバイクの人みたいな感じです。関わり方は人それぞれ。私は、横にいてあげる人として、このままでいいかなと思っています。



本田 綾乃さん Ayano Honda

ACCOMPANIST 02

Q 普段はどのようなお仕事をしていますか？

幼稚園生から大学生まで、バレエとコンテンポラリーダンスと英語を教えています。自分自身の活動として、日本舞踊もしています。



Q アカンパニストとして活動をはじめたきっかけは？

「ヨコハマ・パトラトリエンナーレ2014」のパフォーマンスワークショップに、イギリスから来た講師のアシスタント兼通訳として関わり、スローレーベルを知りました。今回はパフォーマンス者としてみんなと踊れたらいいなあと、SLOW MOVEMENTに参加しました。もともとこういう活動をはじめたきっかけは、小さい頃に海外にいた経験からです。英語がしゃべれなくて、言語の壁で孤独を感じていて、当時はすごく辛かったんです。その中で、英語が喋れないからと壁をつくってしまう人と、一生懸命私の拙い英語を理解してくれようとしてくれた人がいて。私もそういう、ちょっと壁を感じている人の可能性を引き出せる存在になれたらと思って、活動をはじめました。

Q どのような活動をしていますか？

いろいろなワークショップや稽古を重ねて、パフォーマンスの作品をつくります。みんな個性が違うので、その中でどのように自分の個性が生まれてくるのかというのをそれぞれが探しながら、ひとつの作品をつくっています。たとえば、今回参加した方が、車椅子を降りて動いたことがなかったというので、今日は降りてちょっと踊ってみようかということになりました。その方と一緒にどういった動きができるのか、どういった可能性があるのかというのを探ってみました。最初は車椅子を降りることに抵抗があって、怖がっていたんですが、徐々に信頼感を抱いてくれて、じゃあちょっと挑戦してみようかなと思ってくださって。それはすごく嬉しかったですね。可能性というのは無限だということを感じて欲しかったです。もちろん車椅子に座ってできることもありますけど、そうでなくても自分の表現はできるんだということを発見してもらったかったので。

Q 創作のときに心がけていることはありますか？

障害があるということに焦点を当てるのではなく、そのひと一人として、どういった可能性があるのかということに焦点を当てて接するようにしています。

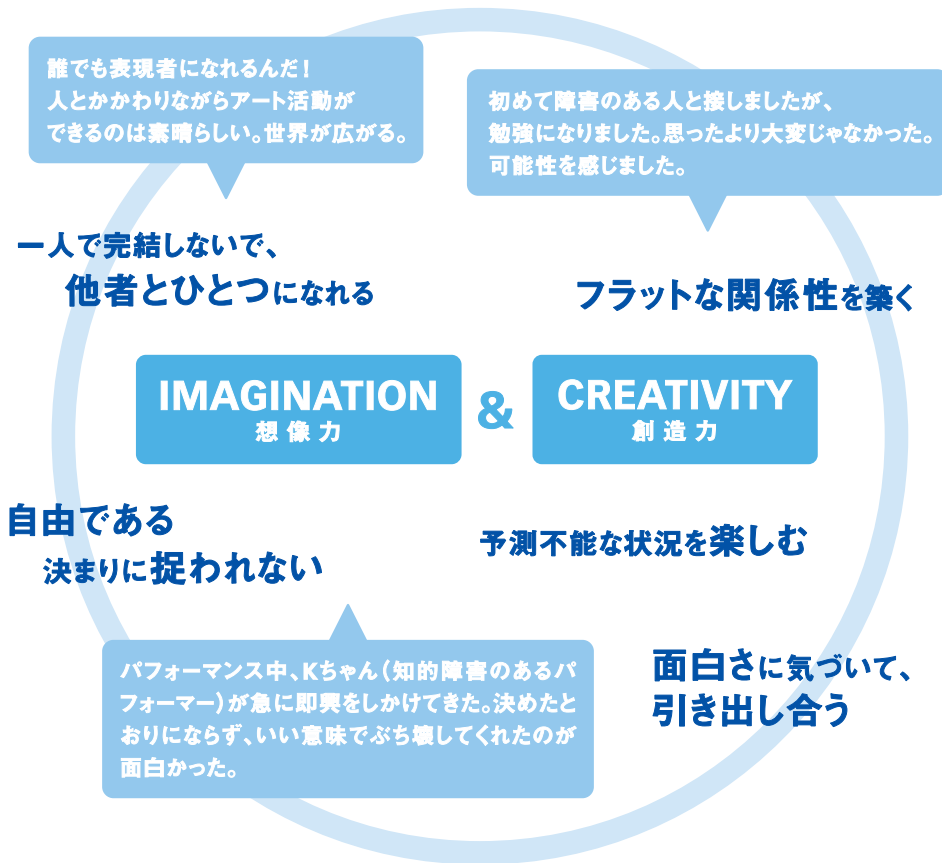
Q 「アカンパニスト」とはどのようなものだと思いますか？

やっぱり、みんなを見守ると言うか、私も、みんなから学ぶことはたくさんあって、みんなも私から学んでもらえることがあったらなとも思っています。あとは、アカンパニストとしては、何かを「こうだよ」と伝えるのではなく、一緒にひとつのものをつくっていただけらなと思います。



アカンパニストをあらわすキーワード

障害のある人と一緒に創作をし、一番そばで寄り添うのがアカンパニスト。
アカンパニストには、どのようなことが必要なのでしょう？
スローレーベルの活動を通して見出したキーワードをアカンパニストたちの声とともに紹介します。



アカンパニストの多様性

年齢、性別、アート経験の有無、障害の有無を乗り越えて関係性を築き、お互いの足りないところを助け合い、いいところを引き出し合う。さらに、障害があることによる制約をうまく表現に昇華できるクリエイティビティを持つ人。それがアカンパニストです。だから、アカンパニストは限られた特別な人だけでなく、あらゆる人が成り得るのです。

アクセスコディネーターとアカンパニストの連携

創作現場で見えてきた課題は、アクセスコディネーター、アカンパニスト、スタッフなど、かかわる人みんなで共有し、解決方法を考えてきました。

CASE STUDY 障害のある人とのコミュニケーションにおけるとまどい

○ 聴覚障害の参加者は、どれくらいこちらの話していることを理解しているんだろう？

今回は手話がなくてもある程度コミュニケーションができる方が参加されていました。ただし、後ろからの呼びかけは聞こえないため、正面で、ゆっくり、はっきりと話をするようにアクセスコディネーターからアカンパニストにアドバイスがありました。

○ 身体障害者の人にとどこまで触れてよいか、どれくらいの可動域があるのかわからない。

身体障害のある参加者の中には、触れてしまうと怪我や生命維持にかかわる箇所がある人もいます。それらを事前にアカンパニスト、スタッフ全員で確認しました。



○ 発達障害の人が突然、怒ったように飛び出して行ってしまった。自分のせいなのだろうか？自分はどうか対応すればよかったのか？

創作の最中に感情的になってその場からいなくなってしまうときは、アクセスコディネーターに報告し、アカンパニストは創作に戻るようしました。障害のある参加者がそのような行動を取ったとしても、アカンパニストが自分自身を責めて問題を一人で抱え込まないようにすることも大事です。その人の障害の特徴や、起こりそうなことについても説明し、理解を深めていきました。



スローレーベルの創作現場では、障害のある人たちと関わるのが初めてのアカンパニストもたくさんいます。アカンパニストの不安やとまどいを共有し、対応の方法をみんなで考えるために、終了後はふりかえりのミーティングを行ってきました。

アクセスコディネーター 廣岡さん

これからの課題

- ・経験やノウハウを蓄積し、人材を発掘育成する
- ・経験やノウハウを、他団体や教室などに共有し、障害のある人が活動できる環境をつくる



障害のある人が「通いやすい生活圏域」に、「ジャンルやレベルの選択肢」があり、「自分のペースで継続的に活動できる」場が増える

アクセスマネージャー、アカンパニストと活動をした方々の声

アクセスマネージャー、アカンパニストとともにアート活動に取り組んだ障害のある参加者やその保護者、施設の方からのコメントを紹介します。

アクセスマネージャーとアカンパニストのかかわりについて

アクセスマネージャーさんがきゅうけい時間に声をかけてくれて、のどがかわっていたので助かった。こまった時に話かけてくれてよかった。

{ 参加者 }



これまででは、どなたに何を伝えていいのか、また聞いていいのか、わからなかったところが、アクセスマネージャーが加わってくれたことで、その方にお伝えできるようになり、とても気持ちよくなりました。

{ 参加者の保護者 }

アクセスマネージャーからはスケジュールなどもわかりやすくご連絡をいただき、とても助かりました。サポートというよりは、仲間!という感じでした!

{ 参加者 }

初めは参加してよいものかどうか不安と葛藤の日々でした。説明の内容や、演出の趣旨が理解できていないことが、作品をつくりあげていくうえでの支障になるのではないかと。予測できない動きが面白いこともあるので大丈夫、と言葉をもらったことでほぼ解消されました。

{ 参加者の保護者 }

最初は胸がドキドキしてできなかったりして、すごく大変だと思ったけれど、アカンパニストが優しくしてくれたので、続けたいと思った。

{ 参加者 }



創作活動に参加して変化したことについて

外部の方との交わりによって、社会と関わる力が付いてきたように思います。また支援する側も可能性への期待が高まっています。

{ 参加者が所属する福祉施設の施設長 }



生活のうえで社会に順応させるため、普通になるべく近づける指導を家庭でも学校でも重要視して来ましたが、本人の良い部分までも否定しているようで、いつも疑問を持ちつつここまで来たような気がします。ここでは様々な人が繋がり、自然と多様性を知り理解して、いろいろな人やものを受け入れているのがスゴイ。特別な場所ではなく、どこにでもある風景になるといいと思います。人との違いをもっと楽しんでいいですね。

{ 参加者の保護者 }

前よりも体の動く範囲が増えた。これまでの生活では人と会う回数が少なすぎたと気づいた。やりたいことが沢山あるなーと行動したい気持ちになった。

{ 参加者 }

今までにない経験をひとつひとつ積み重ねていくことで、達成感や自信に繋がり、集中力が以前より増してきたのではないかと思います。

{ 参加者が所属する福祉施設の支援者 }



創作活動に対する、15人のAnswer

QUESTION

障害のある人が(障害のある人と)創作活動に取り組む際に**必要なこと**は何ですか？

ANS. 01-15

アクセスマネージャーやアカンパニスト、アーティスト、障害のある参加者、福祉施設施設長、行政関係者など、スローレーベルの活動に関わる多様な人の考えをご紹介します。

ANS. 01

「距離をぐっと近くする」

障害の分野では今までその世界について知る人があまりに少なく、多くの価値が見過ごされてきました。ともに創作を行う中で必要かつ大切な**互いの距離をぐっと近くして、素晴らしい価値をともに語り合い、浮き彫りにし、その魅力を最大限発信する**ということなのではないかと思えます。

{ 和田夏実さん アカンパニスト }



ANS. 02

「社会をデザインしよう!!」

国際障害者年は「障害者を締め出す社会は、弱くて脆い社会である」と宣言しました。それは、マジョリティの側がマイノリティに配慮するというようなことではなく、**社会にはいろいろなモノサシがあるべき**というメッセージです。**私たちはどのような社会をデザインすべきか—そのひとつの答えが障害のある方たちの活動の中にあります。**

{ 村岡福藏さん 横浜市社会福祉協議会 障害者支援センター 室長 }

「環境づくり」

芸術・創作活動は障害のある方の生活の充実や自立支援の側面からも充実が求められます。現状ではそうした活動を楽しむ場や機会の少なさ、情報が入手しづらいという課題があります。横浜市障害者プランでも掲げていますが、こうした課題に対応して、より多くの方が**芸術活動に参加しやすい環境づくり**を進めていくことが必要です。

ANS. 03

{ 上條浩さん 横浜市健康福祉局 障害福祉課長 }



ANS. 04

「面白さを見い出すこと」

作品制作には障害のあるなしに関わらず、規模に応じた制作環境(制作に集中することのできる時間、場所、資金など)が必要になりますが、特に、**障害のある方の切実な思いに裏付けられた表現に触れようとするとき、何かしら「面白さ」を見い出すことのできる人が周囲にいるかどうか、**ということは大切な要素ではないでしょうか。

{ 佐藤直子さん 横浜市民ギャラリーあざみ野 フェローアートギャラリー担当学芸員 }



ANS. 05

「自由に描ける雰囲気」

創作される方は、時間内に描かなくてもよし、早く仕上げてもよし、描かずに他の人が制作するのを観るのもよしというように、**自由が保障されている雰囲気**の中であると、素材に対して心が動いたときに、そのときの気持ちがぐっと描きやすさを感じています。

{ 加藤晃一さん 社会福祉法人あさみどりの会 わらび福祉園 絵画担当 生活支援員 }

「安心できる環境。時間。そして魅力を見出し、引き出す人。」

ANS. 06

それぞれの**人に合ったやり方を見極めつつ、客観的にその人が作るモノやその人自身が持つ特徴や面白さを見出し、上手に引き出していける人がいれば、お互いに刺激を受けながらさらに面白いモノやコトができていく**気がします。

{ 井上唯さん アーティスト }

ANS. 07

「特に無いです」

全ての健常者が創作活動に取り組むことができることと同じで、全ての障害者が創作活動に取り組むことができると思っています。

{ 神原健太さん SLOW MOVEMENT 参加者/障害当事者 }





ANS. 08

「個性を磨く！」

磨かれた個性は必ず誰かに見い出され、見出した人の個性も磨かれる。個性は磨くと特技に生まれ変わる。スロームーブメントはいろいろな個性、特技を持った人たちが集い、表現し補完しあってこそ生まれるパフォーマンス。常日頃から他者と個性を磨き合って、自分も周りもピカピカにしよう。

{ 金井ケイスケ サークスアーティスト }

「自分と向き合ってみる」

自分に今何ができるかを認識すると、キラリと輝く個性が見えてくる。できること、できないこと、やりたいことが明確になるとお互い自然と補い合うことができるようになる。これは健常者も障害者もまったく同じことだけど。

{ 坂東美佳さん ミュージシャン }

ANS. 10

「強みに注目」

障害のある人との活動に限ったことではないが、「歩けない」「抽象的な説明が理解できない」「一人で稽古に通えない」などといった「できないこと」に目を向けていては作品づくりどころか、カンパニーが成り立たない事態にもなってしまいます。「表情が豊か」「リズム感が良い」「細かい点に気がつく」など、得意な点・強みに出来る点に着目して生かす視点を、本人も一緒に活動する人も持つことで、出来ない事の悪循環に陥らずに楽しんで作品づくりが進められると思います。

{ 前場紀子さん アクセスコーディネーター }



「創作活動に取り組む機会の拡充」

障害の有無に関わらず、誰もが創作活動を行い、参加し、鑑賞できることは、潤いのある心豊かな地域生活を送るうえで大切な要素の一つです。創作活動を行うことや発表すること、多彩なジャンルの創作活動を鑑賞することなど、障害のある方が創作活動に親しみ、楽しめる機会の拡充は、社会参加の推進につながると考えています。

ANS. 11 |

{ 長谷川理香子さん 神奈川県 保健福祉局 福祉部 障害福祉課社会参加推進グループ 主査 }

「やりたいと思う気持ちを尊重すること」

創作活動をする中で、支援する側が考えるのではなく当事者主導で活動することで、イメージが膨らみ主体性が発揮されると思っています。また、できることは自分でやることにより、達成感を味わうことができるので、その気持ちを大切にしています。

ANS. 12

{ 和田剛さん 社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団 障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール 管理・文化事業課 職員 }

ANS. 13

「環境(材料、道具、場所、雰囲気など)」

まず、創作できる場所、時間があること。創作活動がはじまればそれぞれのペースで創作は進んでいきます。集中することでいつのまにか気になることも気にならなくなる、そんな環境を作ります。作品が認められることで創作のモチベーションが上がります。展覧会等で人目に触れる機会を作ることも大事だと考えます。

{ 南芳枝さん アートかれん 施設長 }



「その場に溶けることだと思います」

ANS. 14 |

取材を通じて感じたのは、人が最もクリエイティビティを発揮するのは、素(す)の状態ということです。体のどこかに力が入っていたり、何かにとらわれていたりすると、思考や行動の回路が複雑になって潜在的なところまで意識が届かなくなります。心と体を整えることができれば、自然と集中力がものすごく高まるように思います。

{ 現代芸術活動チーム「目」 }

ANS. 15

「察知・即行動」

いい創作はいい場づくりが何よりも大事です。場を盛り上げていくことが何よりもです。しかし、土台をなおざりにしてはならないです。危険の察知はもちろんですが、気や場が下がっていること、あるいは下がりそうになる要因に気づくこと、それらを避ける、あるいは排除する行動力が大事です。スリルとは安全が確保されて成り立つものです。



{ 齊藤コンさん アカンパニスト }

スローレーベルでは今年度、神奈川県内にある障害福祉・文化芸術関連施設及び団体等と連携しながら、障害のある人々が、自身が望むかたちでアートに参加できる社会の実現を目指して様々なプログラムを実施してきました。

アートを学ぶ

障害のある人々のアート活動を考えるうえで基本となるアートの知識や現場の事情などを学びました。入門的な座学から現代美術の最先端で活躍するアーティストによる刺激的なイベントまで、幅広く実施しました。

file.01 基礎座学

「多様化するアートの形とキャリアアップ」

現代アートの現場における表現の多様化と可能性、アーティストとしてのキャリアアップに必要なことなどを、初心者でもわかりやすく解説しました。

2015/11/4 18:00-19:00

会場：横浜市民ギャラリーあざみ野 参加者数：23名

講師：岡田勉(象の鼻テラス アートディレクター)

file.02 応用座学

「作品の保護管理と展覧会制作」

完成した作品を適切な形で保管する方法と、最も良い形で公開するための展覧会制作の方法について、具体的な事例を交えながら解説しました。

2015/11/17 16:00-17:00

会場：横浜市民ギャラリーあざみ野 参加者数：17名

講師：佐藤直子(横浜市民ギャラリーあざみ野 フェローアートギャラリー担当学芸員)

file.03 体験イベント

「現代アートに触れてみよう」

現代アートの最前線で活躍するアーティストを講師に迎え、多様な参加者が現代アートを体験し、交流するワークショップを開催しました。

2015/12/12 14:00-16:00

会場：障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール

講師：現代芸術活動チーム「目」 参加者数：45名



法律を学ぶ

障害のあるアーティストの権利を守りながら、その作品を発表・販売などをするための考え方を学びました。近年、表現手法が多様になる中で、複雑になっていく権利の課題についても話し合いました。

file.04 基礎座学

「絵画・造形作品に関する著作権の権利保護」

障害のある人々が制作した絵画や造形作品に関する著作権の権利保護について、具体的な事例を交えながら解説しました。

2015/11/4 19:30-20:30 参加者数：20名

会場：横浜市民ギャラリーあざみ野

講師：川島志保(川島法律事務所 弁護士)



file.05 応用座学

「新たな表現領域に関する著作権の権利保護」

表現の多様化に伴い、想定され得る様々な作品の著作権の権利保護について、具体的な事例を交えながら解説する講座を実施しました。

2015/11/17 17:30-18:30

会場：横浜市民ギャラリーあざみ野

講師：永井幸輔(Arts and Law 弁護士)

参加者数：14名

展覧会づくりを学ぶ

展覧会は作品や活動を広く発信するメディアであると同時に、人々が出会い、対話をする場にもなります。展覧会づくりのプロセスを体験する実習と、福祉施設が企画段階から関わる参加型展示会を実施しました。

file.06 体験実習

「展覧会を制作してみよう」

学芸員の指導のもと、作品の正しい扱い方や魅力的な見せ方の実習講座をしました。

1. 作品の扱い方を学ぼう

2015/11/26 13:00-15:30 参加者数:8名

会場:横浜市岩間市民プラザ

講師:佐藤直子(横浜市民ギャラリーあざみ野 フェロアートギャラリー担当学芸員)、

栗原元(インストララー)

2. 作品の見せ方を学ぼう

2016/1/10 13:00-16:30 参加者数:7名

会場:横浜市民ギャラリーあざみ野 フェロアートギャラリー

講師:佐藤直子(横浜市民ギャラリーあざみ野 フェロアートギャラリー担当学芸員)、

栗原元(インストララー)



file.07 参加型展示会 企画会議

【第1回企画会議】2016/1/25 14:00-16:30 会場:アートかれん

参加施設:アート・メープルかれん、studio COOCA、studio FLAT

【第2回企画会議】2016/2/19 16:00-18:00 会場:象の鼻テラス

参加施設:アート・メープルかれん、studio COOCA、studio FLAT

参加型展示会では、県内でアート活動を行う3つの福祉施設が集い、対話を重ねながら展示を創り上げました。それぞれの施設のアート活動の独自性は何か? どうしたら活動の環を地域全体に広げていけるのか? を企画会議で話し合い、展示に表現しました。

file.08 参加型展示会

「展」

県内福祉施設とともに企画した作品展示と1年間の活動報告の展覧会を開催しました。

2016/3/12-3/21 10:00-18:00

会場:象の鼻テラス 作品数:130点

参加施設:アート・メープルかれん

studio COOCA、studio FLAT

【参加型展示会関連イベント】

「ギャラリートーク&座談会」

作品についてのギャラリートークと県内のアート活動についてのトークを開催しました。

2016/3/12 14:00-16:00 会場:象の鼻テラス

スピーカー:大平暁(studio FLAT)

北澤桃子(studio COOCA)

南芳枝(アート・メープルかれん)

「ふもっふっ 人形劇」

2016/3/12 13:30-13:45 会場:象の鼻テラス

脚本・演出・出演:人形劇団ふもっふっ二代目

「さやかライブペインティング」

2016/3/12 13:30-17:30 会場:象の鼻テラス



地域をみる- 体験ツアー

神奈川県内で先進的なアート活動を実践している施設や美術館を訪ねるツアーを実施しました。地域資源の発見やネットワークづくりにつながりました。

file.09 視察ツアー



「福祉の現場の最新アートを見学しよう」

県内の施設3箇所を巡るバスツアーを実施しました。

2015/8/27 10:00-17:00 参加者数:19名

視察先: Studio COOCA(平塚市)→

カブカブひかりが丘(横浜市旭区)→

アートかれん(横浜市港北区)

file.10 体験ツアー

「美術館に行ってみよう」美術館での作品鑑賞ツアーを実施しました。

2016/1/9 10:00-15:00 参加者数:70名

会場:神奈川県立近代美術館鎌倉館



相談窓口

障害のある人のアート活動を「はじめる」「すすめる」にあたって出てくる疑問や悩みなどについて無料で相談をうける窓口を開設しました。相談の内容に応じて、弁護士や学芸員といった専門家や、県内の関係施設・団体と協力しながら回答する体制を整えました。



出張相談窓口: イベント会場などに出張しての窓口

開設も行いました。

相談窓口件数(2016年3月10日現在): 200件

2015/12/8 16:00-18:00 会場: かながわ県民センター

2016/1/30 13:00-16:00 会場: 象の鼻テラス

ほか、全6回

協力委員会 施設ヒアリング

神奈川県内の施設へのヒアリングを通しての地域の現状把握や、協力委員会での専門家からのサポートなど、様々なご意見・ご協力をいただきながらプログラムをすすめました。



協力委員会

協力委員
栗栖 良依 (特定非営利活動法人スローレベル 理事長)
和田 剛 (社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団 障害者スポーツ文化センター横浜ラポール)
佐藤 直子 (横浜市芸術文化振興財団 横浜市民ギャラリーあざみ野 フェローアートギャラリー担当学芸員)
長谷川 理香子 (神奈川県保健福祉局 福祉部障害福祉課)
田口 英之 (神奈川県民局 くらし県民部文化課)
村岡 福蔵 (社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会障害者支援センター 室長)
上條 浩 (横浜市健康福祉局 障害福祉部 障害福祉課)
河本 一満 (横浜市文化観光局 文化芸術創造都市推進部 創造都市推進課)
南 芳枝 (社会福祉法人かれん アートかれん施設長)
岡田 勉 (スパイラル/株式会社ワコールアートセンター チーフキュレーター、象の鼻テラス アートディレクター)

協力委員会開催日時・場所

第1回協力委員会	2015/8/17	11:00-12:00	象の鼻テラス
第2回協力委員会	2015/10/14	11:00-12:00	象の鼻テラス
第3回協力委員会	2015/12/14	11:00-12:00	象の鼻テラス
第4回協力委員会	2016/3/14	11:00-12:00	象の鼻テラス

神奈川県内施設ヒアリング

開催日時・場所	
2015/8/5	横浜市中部療育センター(横浜市)
2015/11/9	studio COOCA(平塚市)
2015/11/9	カブカブひかりが丘(横浜市)
2015/12/2	10:00-12:00 セルブ宮前こぼと(川崎市)
2015/12/20	11:00-12:00 アトリエそらのいる(鎌倉市)
2016/1/16	13:00-14:00 港南福祉ホーム(横浜市)
2016/1/28	14:00-15:30 湘南の風(逗子市)
ほか、全17件	

SLOW LABEL (スローレーベル) について

マsproダクションから、スローマニュファクチャリングへ

大量生産では実現できない自由なものづくりをめざす、新しい試みです



国内外で活躍するアーティストと企業や福祉施設などを繋げ、

特色を活かした新しい「モノづくり」と「コトづくり」に取り組んでいます。

機械でつくるマsproダクトでも、熟練した職人の手によるクラフトでもない、誰もが生産活動に楽しく参加できるマスクラフトづくりなどを通じて、地域に暮らす多様な人々の出会いと協働の機会を提供しています。

沿革

誰もが居場所や役割を実感できる地域社会の実現をめざして



2009年、象の鼻テラス(横浜市)にて国内外の第一線で活躍するアーティストと福祉施設による新しいものづくり「横浜ランデヴープロジェクト」がはじまりました。2011年、その取り組みの中から、手作り雑貨ブランド「SLOW LABEL(スローレーベル)」が誕生。翌年、アーティストがデザインした“道具”や“製法”を用いて、学生や主婦、普段は企業勤めをしている社会人など、年齢も肩書きも違う人々が、ものづくりを通じて交流する市民活動「SLOW FACTORY(スローファクトリー)」が開始され、活動が全国各地へ広まりました。2014年、特定非営利活動法人スローレーベル設立。同年、障害者と多様な分野のプロフェッショナルの協働から生まれる現代アートの国際展「ヨコハマ・パタリエンナーレ」を開催。2015年より、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」及び、「SLOW MOVEMENT(スロームーブメント)」等の活動を通じて、障害のある表現者が福祉的環境の外で表現活動をする上でのアクセシビリティ向上に向けた人材育成と環境整備に取り組んでいます。

ブランディングパートナー

スローレーベル徳島 / BLUE BIRD COLLECTION (2013年～)
スローレーベル熊本 / SLOW GELATO (2016年～)

ふりかえって

東京五輪・パラリンピックが開催される2020年をターゲットイヤーとして、社会の価値観を変えていく力をもつ現代アートという分野に障害のある人々とともに挑戦しようと、横浜市の文化観光局と健康福祉局と一緒に立ち上げたのが障害者と多様な分野のプロフェッショナルによる現代アートの国際展「ヨコハマ・パラトリエンナーレ2014」だった。この背景には、2020年までの3回の開催と準備過程を通じて、社会に「障害」とは何かを問うこと、そして、地域社会のダイバーシティを推進する、という明確なビジョンと計画があった。

フェスティバルの中で、主催者として最も衝撃を受けたのがパフォーマンスアートのワークショップだった。それは、興味がある人は多いのに、物理的、心理的な壁に阻まれて会場に来ることができない、という事実だ。障害者アートは何をもって評価するのかという議論が常につきまとう分野だが、私の個人的見解は「アートに障害の有無は関係ない」というもの。そういう観点から言うと、舞台上に立った後に、表現者として評価されるか否かは障害の有無とは無関係だ。ただし、もしも何らかの障壁があるが故に舞台上に立つことができないとするならば、それはフェアではない。恐らく、これはパフォーマンスアートに限られることではないだろう。私たちはこのとき、次のように考えた。

障害のある人が何かに挑戦したいと感じたときに、社会の中に何らかの障壁があるのならば、それを取り除く術を創造したい。別の言い方をすると、創作と発表の環境が整い、表現者人口が増えないことには、質の高いアートは生まれない。

この経験を踏まえて、「アクセスコーディネーター」と「アカンパニスト」という人材の研究開発に取り組んだ。障害を感じる個人と社会の間で、通訳のような役割を果たしながら緩やかに相互理解を促し、障壁を取り除いて表現の場を創り出していく。まだ一年足らずの活動ではあるが、少しずつ環境が整い、これまで参加することのなかった人に想いが届きはじめている手応えを感じている。一方で、障害のある人にとって長距離の移動は、肉体的にも精神的にも負担がかかる。こうした人材と環境が、それぞれの地域社会の中にあることが日常的、継続的に取り組むための条件となるだろう。今後は、他地域から研修生を受け入れたり、一般の絵画やダンスの教室、プロの劇団や文化施設に、障害のある表現者とアクセスコーディネーターと一緒に派遣するなどといったアウトリーチ活動を展開したい。そうして、私たちの経験をより多くの個人や団体と共有するとともに、新たな人材を発掘育成していきたいと考えている。



栗栖 良依 Kris Yoshie

特定非営利活動法人スローレーベル 理事長

「日常における非日常」をテーマに、アートやデザインの領域に収まらない自由な発想で、異分野・異文化の人や地域を繋げ、新しい価値を創造するプロジェクトを多方面で展開。2008年より、過疎化の進む地域で市民参加型パフォーマンス作品を制作。2010年、骨肉腫を患ったことがきっかけで、右下肢機能全廃。障害福祉の世界と出会う。11年より、SLOW LABEL ディレクター。ヨコハマ・パラトリエンナーレ2014 総合ディレクター。

スローレーベル

アクセシビリティ&アカンパニスト 研究プログラム2015

障害のある人が社会の中でアート活動をはじめるために

発行日：2016年3月31日

発行元：特定非営利活動法人スローレーベル

URL <http://www.slowlabel.info/>

企画・執筆：栗栖良依、野崎美樹(特定非営利活動法人スローレーベル)

編集：井尻貴子、橋本誠

アートディレクション：古川智基(SAFARI inc.)

デザイン：村上光(SAFARI inc.)

写真：麻野喬介(P21下)、加藤健(P18,P24)、

427FOTO(表紙,P4-6,P8-17,P19-25,P29)

制作コーディネート：一般社団法人ノマドプロダクション

印刷・製本：株式会社協進印刷

協力：スパイラル/株式会社ワコールアートセンター

*本書は「平成27年度 障害者の芸術活動支援モデル事業(厚生労働省)」の一環として制作しました。